

平成14年(2002年)7月2日 火曜日

坂戸工作所⑫

北野靖志の「元気が行く」

現場リポート・元氣印経営の秘密

「より小型、軽量、高性能な磁石を」

解体機の坂戸工作所が新型磁石開発に全力をあげる背景には二〇〇一年四月から施行された「建設資材リサイクル法」がある。

同法の施行により、解体現場でのコンクリートガラと鉄筋の完全分別が義務付けられた。鉄筋回収の作業効率アップは解体業者の大きな悩みだから「こうした要望にいかに対応され

るかが勝負の分かれ目だ」と社長の坂戸誠一はみる。

新型磁石の開発に向けて具体的な技術目標として掲

のほぼ倍となるため普及は進んでいない。「小型、軽量、高性能磁石を開発、これを内製化して製造コストはもとより、販売価格を大幅に引き下げれば、普及が加速するはず」と坂戸は予想する。

《坂戸工作所》

社長＝坂戸誠一氏
住所＝千葉市花見川区
☎043・259・0131
業種＝解体機械製造業
資本金＝5720万円
設立＝1945年4月
従業員数＝30人
年間売上高＝9億円
(2002年度見込み)

技術も価格も年内クリア

より小さく、軽い、強い磁石を②

同社は従来、鉄筋回収用には強力マグネット付き小型の「スーパースモ」やマグネット付きバケットの「ハゲマグ」を投入してき

が、価格が一般の解体機

けたのが、従来磁石に比べて①二七％の軽量化②二〇％の小型化③吸着距離換算で四〇％の高性能化の三点だった。

「これまで使いたくてもできなかった都会のビル密集地など狭い解体現場でも

吸着する能力を示す。この数値が高いほど磁石が強く、鉄筋を回収する力が大きいから作業効率が上がる。さらに磁石の小型、軽量化は解体機自体のコンパクト化につながる。

使用が可能となり、解体工事は飛躍的に効率化でき

この新型磁石の開発で同



鉄筋をいかに効率よく回収するか―解体現場の悩みだ

社は日本版SBI（スモールビジネス・イノベーションリサーチ）とされる、中小企業総合事業団の二〇〇〇年度の課題対応技術革新事業の指定を受けた。

「市街地対応型コンクリート小割機用電磁石に関する研究開発」と題する研究開発テーマで、〇二年度までの三カ年で約五千五百万円の資金助成を受ける。

すでに新型磁石は協力企業との共同研究で、技術的めどをつけているほか、価格面で目標としてきた六百万円もいま一步のところに来ている、という。年内にはこれらの問題をすべてクリア、各種試験を経たうえで来年四月から搭載機の発売に踏みきる予定だ。

〓文中敬称略〓
(論説委員長)